

秋葉四郎著

『茂吉からの手紙』

(ながらみ書房)

斎藤茂吉の書簡九三〇三通の中から、永井ふさ子、結城哀草果、杉浦翠子、山口茂吉、原阿佐緒、佐藤佐太郎、河野多麻、北杜夫の八名への書簡に焦点をあて、紹介した書。あとがきに「若い後進に送った書簡は、格別意義深く(中略)内容豊かな助言となっている。」とあるように、茂吉の手紙には、今日にも通じる作歌の極意や選歌の在り方などが綴られ、例えば、同郷出身で大きな期待を寄せられていた結城哀草果には「軽くなく、浮華でなくどつしりとした歌を」、「真実に家事の労働をしながら、その裏に「いのち」のひらめきの歌を」示すように指南し、選者の立場の杉浦翠子に対しては「やさしく、つつましくけんそんの方よし。」と諭す。

また、恋愛関係にあった永井ふさ子と茂吉が合作で濃厚な愛の一首を完成させ、茂吉が「人麿以上だ」と喜び、実子の北杜夫に対しては熱烈な教育ババぶりを發揮するなど、愛情に突き動かされる茂吉の人間性が発見できるのも、本書の醍醐味の一つだ。

(久保田智栄子)

新村出宛佐佐木信綱書簡

『佐新書簡』

(竹柏会心の花)

佐佐木信綱と四歳年下の新村出(ともに九十過ぎまで生きた)との五十八年間、一四〇〇通に及ぶ書簡のうち、主に信綱のものを整理し、活字化したもの。

信綱発信の五七四通は封書が半数以上。ほぼ京都にある新村出記念財団重山文庫に保管されていた。(新村発のものは八四〇通中二十五通が採取されている。)

信綱門下の国語学者・林大が一九九七年に翻印・翻字作業を開始。(それ以前に重山文庫職員の整理があった。)佐佐木家にその資料の存在が伝わったのが二〇一六年。そこから一気に動き、「心の花」創刊百二十周年記念事業としての刊行に至る。

難読と言われる信綱の文字を林が八十代後半の五年をかけて解読した熱意に驚く。内容的な目次をつけて整理した北川英昭の苦勞も思う。内容は、国文学・言語学の碩学同士の情報交換、日常のさまざまに及ぶ。「軽妙に洒脱に真摯に交わりあった心の軌跡」と帯にあるとおり。信頼できる相手あつての手紙・葉書だったのだらう。ただ圧倒された。

(大松 達知)

松本美穂歌集

『黒い光』

(角川書店)

フランスに長く住んでいた作者の第一歌集。副題に「二〇一五年パリ同時多発テロ事件・その後」とある。写真が多く収められ、写真集と言つていい趣だが、短歌と写真は互いを補填するものではない。さまざまな人種や宗教のもと暮らす人々の内面を短歌で、生きた姿を写真で伝えようとしている。

自爆テロはいま kamikazu と呼ばれをり若く死にゆくことのみ似たる

この歌の傍らには、テロの現場に哀悼のキャンドルを置く男性の写真。周辺に置かれたキャンドルの数の夥しさが悲劇を物語り、作者は思いを秘め、静かに、時に激しく街や人を見つめている。

追悼、愛国、右へ做へといふごとくト  
リコロールの顔が増えゆく

雨を来てシヨア記念館の受付に国籍問  
はる 石に石の影

歌集名「黒い光」は光と闇が同時に存在するイメージだという。平穩な生活の中に差別があり、テロの恐怖が影を落とす。ポピュリズムの広がりやを深く考える必要性を問う歌集でもある。

(福士 りか)